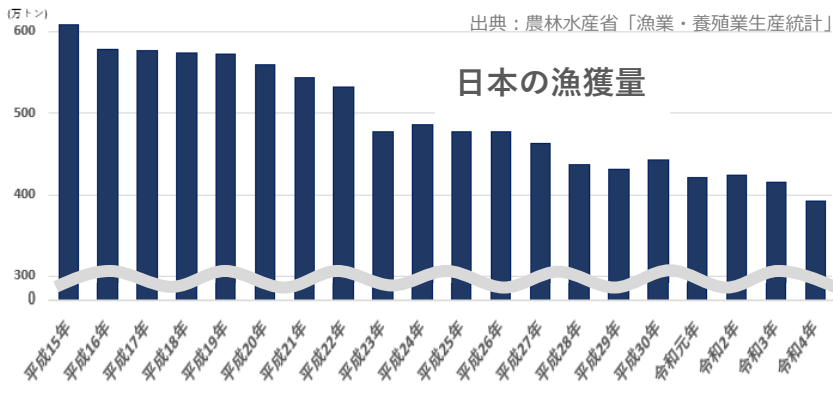


地域活性化に貢献する 企業を訪問

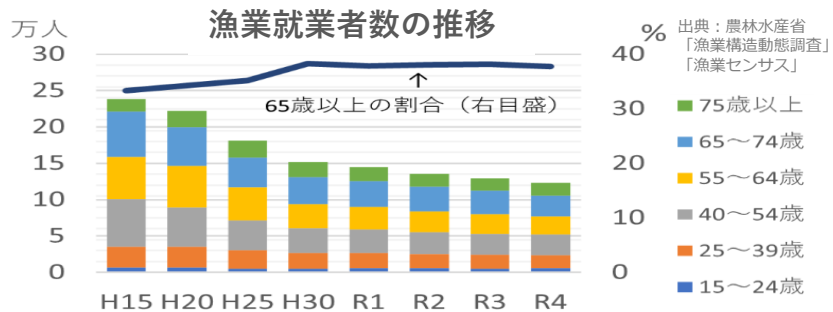
過去20年間、日本の漁獲量は減少傾向にあります。ピーク時(昭和59年)に比べ、3分の1以下にまで減少しています。

要因として、温暖化に伴う海水温の上昇や海流の変化、外国漁船による漁獲圧力などが考えられています。

また、災害の影響で一部地域の漁業が大きな打撃を受けていることも要因の一つでしょう。



さらに日本の漁業は、担い手不足が深刻な問題となっています。特に、漁業従事者の高齢化が進んでおり、65歳以上が全体の約4割を占めています。



漁業就業者の減少が続く中、少子高齢化が進むことで、若い労働力の確保は一層難しくなっており、未来の漁業は厳しい状況といえるかもしれません。

そこで、今回は千葉県館山市で革新的な手法によって魚種開発に取り組み、独自の養殖業を営む株式会社さかなドリームに取材しました。

「株式会社さかなドリーム」(千葉県館山市)



さかなドリーム社は、最新の技術と知識を駆使し、環境保護と経済成長を両立させることで、持続可能な水産業の発展を目指しています。

さかなドリーム社においてマーケティング責任者を務める石崎さんに「養殖業の現状とさかなドリーム社の取り組み」についてインタビューしました。

これからの時代に求められる養殖
「高度な品種改良」と「生物多様性の維持」の両立

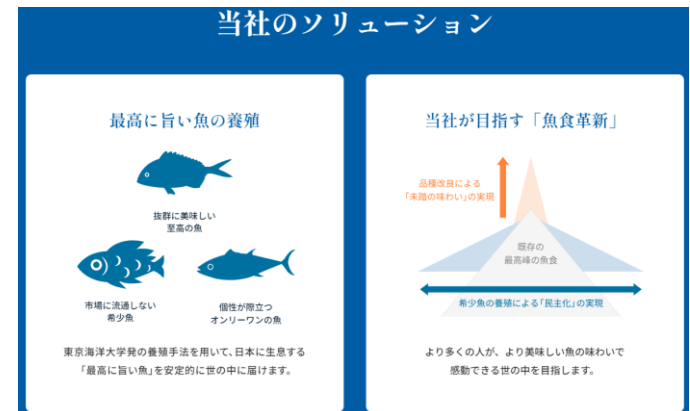
日本の魚やその料理は、世界トップクラスの品質を誇る一方、日常的に食べられている魚の種類は、日本の水域に棲む魚全体の1%未満に過ぎないと言われています。

日本に生息する4千種の魚の中には、本当はよく知られた魚を凌ぐ逸品が数多く存在しているものの、不安定な漁獲量や知名度の低さが理由で、捨てられてしまうことさえあることは「非常に残念」と話す石崎さん。

世界一旨い魚を創り、届ける

美味ではあるが、あまり流通せず、養殖も難しい魚「カイワリ」と、味が良くて飼いやすい南房総産の「金アジ」を掛け合わせた世界初の養殖魚「夢あじ」の養殖に取り組んでいます。夢あじはカイワリの脂ののった美味しさを持ちながら、養殖しやすい金アジの特徴を持ち、金アジの1.5倍の成長スピードがあります。

さかなドリーム社は、世界最高峰の技術によって、まだ誰も味わったことのない「世界一旨い魚」を創り出すことを目指しています。



夢あじの品質の高さを浸透させたい

夢あじは、品質の高さをしっかりと世の中に浸透していくことで、アジ科における最高級クラスの卸単価を目標としています。

課題へのアプローチ

他方で、養殖には様々な問題があります。例えば、品種改良された養殖魚が生け簀から逃亡すると、野生種との交配により野生集団の遺伝的攪乱を引き起こします。

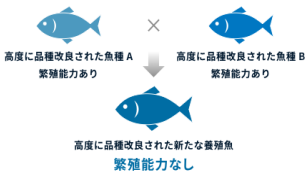
そこで、養殖魚の開発に際して、繁殖能力を持たない品種に限り海面養殖することをルールとしています。改良種はそれら事項を確認したうえで市場に流通されます。

ハイブリッド化による「繁殖能力を持たない」養殖魚の生産

異なる種を親に持つ新品種を養殖することで「高度な品種改良」と「逃亡魚による遺伝的攪乱の防止」の両立が可能です。

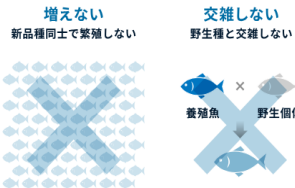
繁殖能力を持たない掛け合わせ

魚の掛け合わせの中には、先天的に「繁殖能力を持たない」ものが存在



繁殖能力を持たないメリット

「繁殖能力を持たない」養殖魚は逃亡魚問題への有効な対応策



南房総市富浦漁港沖の生簀で約7000~8000匹を育成中



現在養殖している魚種は、出荷まで1~1.5年の期間を要し、初出荷は2025年初~春の予定

リスクに強い魚を開発する

また、養殖業全体に言えることですが、台風や地球温暖化による海水温の上昇等のリスクは常にあります。

対策として、リスクにより強い魚を品種改良によって開発すること、また、漁場を分散・拡大すること。とりわけ、房総半島においては台風が大きな問題。

漁場の拡大については、現在静岡県沼津市でも養殖生産を始めました。そのほか、各県からオファー自体はあるようですが、初期的には首都圏へのアクセスの良さを重視しており、関東エリアを中心に探しています。

地方公共団体からの支援は「非常に重要」

地方公共団体との関係についてお聞きしたところ、館山市には研究施設を建設するための土地を、千葉県（館山水産事務所）には漁業関係者を紹介してもらったことで、「地方公共団体からの支援は非常に重要」とのことでした。

なお、県内他の自治体でも養殖をやりたいと考えてアプローチを続けているそうです。

区画漁業権を増やしてほしい

現在、区画漁業権がないため、養殖生産は南房総市の岩井富浦漁協に委託しています。

区画漁業権は、行政の漁場計画（海区漁場計画及び内水面漁場計画）において設定されるため、すぐに取得することは難しいそうです。

石崎さんは自社でも生産できるように、将来的に区画漁業権を取得したいと希望していました。



最後に

今般、石崎さんの情熱とさかなドリーム社の技術やビジョンに触れ、日本の漁業に対する新たな可能性を感じました。

近い将来、館山の夢あじが日本の食卓の中心になる日が訪れるかもしれません。

これからも彼らの挑戦を見守り、応援していきたいと思えます。

